

獨 協 大 学 長 殿

学 外 研 修 報 告 書

私は、学外研修員として出張しておりましたが、このたび研修を終えて帰任いたしました。
つきましては、次のとおりご報告申し上げます。

報 告 日	2026 年 5 月 18 日	所 属	外国語学部フランス語学科
職 名	教授	氏 名	廣 田 愛 理 
研修種別	1. 海 外 (2). 国 内	研修種類	1. 長 期 (2). 短 期
研修期間	2025 年 9 月 20 日 ~ 2026 年 3 月 19 日		
学外における主な研修機関および訪問先 専修大学			
出張目的または研究題目 フランスにおける工業化の展開と伝統産業			
資 格 1. 2025 年度獨協大学学外研修員（派遣） 2. 本学承認の学外研修員（自費等） 3. その他（ ）			
大学から支給された費用（要清算書類）・補助金額 25 万円			
研修内容（1. 研修経過の詳細 2. 研究成果発表の予定 3. その他 を記入） （1. 研修課程の詳細） 19 世紀に工業化が進展したフランスにおいて、同国の主力製品であった高級繊維製品（絹織物やレース製品など、特定の顧客層を対象とする「ニッチ製品」）の生産は、「近代的大工業」、「農村的組織の中に常に浸透した工業」、「大都市の芸術・奢侈品産業に関わる伝統的産業」という 3 つの生産システムが相互補完的に結びつく産業分野であったといえる。こうしたニッチ製品は、特化した都市部の集团的・分散的マニファクチュアによって生産され、その各工程において様々なカテゴリーの労働者が			

提出先：所属学部長→学長→人事課

裏面につづく

関与していたことがこれまでの先行研究によって明らかにされている。

とりわけリヨンは、第一次工業化の時代において、標準化された工場制大量生産ではなく、時代の変化に適応した柔軟な専門化を基盤とする地域的生産システムを形成した都市の代表例として知られている。M.マルティニによれば、リヨンのレース産業では、大企業・中規模マニュファクチュア・家内工業が独自の補完関係を構築し、大規模機械生産と手刺繍・仕上げ工程など家内工業による手作業とが相互補完的に共存していた。その結果、生産コストの削減と高品質の維持が同時に実現されたのである。また、このような集中生産体制を支える下請け工程は、高度な技術を有する多数の女性職人によって担われていた。

以上のように、先行研究では、機械生産の発展を支える存在として、手作業による下請け工程の重要性が指摘されている。本研究では、この点を踏まえつつ、同じくニッチ製品の生産に携わりながらも、リヨンやカレーにおけるレース産業の発展の陰で淘汰の危機に直面しつつ、新たな活路を見出したロレーヌ地方のリュネヴィル刺繍に着目した。

チュールレースを模した手刺繍として成立したリュネヴィル刺繍は、当時綿工業の中心地の一つであったロレーヌ地方において、モード産業における需要の高まりを背景に、19世紀前半に生産を拡大した。しかし1860年代半ばになると、刺繍の機械化が進展するなかで、ルイ・フェリーは機械生産への対抗策として、従来のリュネヴィル刺繍の技法を応用し、ビーズやスパンコールを刺繍する新たな技法を考案した。その結果、従来型のリュネヴィル刺繍が衰退する一方で、新たなリュネヴィル刺繍は、とりわけ1920年代のパリ・オートクチュール産業を支える下請け産業として発展したことが確認できる。

本研究は、この事例を通じて、機械化の進展という時代的潮流のなかで、伝統的手工業の技術の応用・転換によって、手仕事の作業効率化・高度技術化が進展した地域産業のあり方を明らかにし、フランスフランス産業における「柔軟な専門化」の一形態を提示した。

(2. 研究成果発表の予定)

本研究成果の一部は、『フランス文化研究』において発表予定である。

(3. その他：今後の課題)

本研究期間中には、近代産業と在来産業の関係について、日本とフランスの比較検討を行うには至らなかった。今後は、同時期の日本の工業化の特質にも留意しながら、日仏比較研究へと発展させることを課題としたい。